Yamato Welfare Foundation
ヤマト福祉財団

NEWS

発行部数8万部
非売品

2026.4.20 Spring

No. 88

ヤマト福祉財団の原点に立ち返る
初代理事長 小倉昌男氏が私たちに託した思いとは

第26回ヤマト福祉財団小倉昌男賞贈呈式
年齢や方法は違っても利用者さんの幸せを願う二人の想いは同じく熱い

2026年度
ヤマト福祉財団助成金決定

助成先レポートVol.53
(NPO)ともいき キッチンみらいず
戦略的リニューアルで守る「作りたい」が力に変わる場所。

リレーコラム
夢をつないで
第36回

社会福祉法人ぷろぼの
会長　山内 民興

Profile
1948年愛媛県生まれ。青山学院大学を卒業後、国内メーカーを経てコンピューター会社を設立。50歳で喉頭ガンになり声帯を摘出し身体障害者3級に。地域活性化や市民ボランティア及び障害者福祉にかかわり、2006年NPO法人ぷろぼの設立。前社会福祉法人ぷろぼの理事長、現会長

社会の屋台骨「福祉」

「福祉」は、地域の暮らしを支え、日常を守る社会の屋台骨です。市民一人ひとりの安心を支える重要な仕組みであり、その中心的な担い手が「社会福祉法人」です。

福祉には、高齢者福祉・児童福祉・障害者福祉の三分野があります。私たちはその中で、障害のある方々の「働く力」を支える障害福祉事業に取り組んでいます。

2006年に事業を始めた当初は、「障害者を働かせるのか」という批判や苦情も少なくありませんでした。しかし、地域に寄り添った丁寧な支援を積み重ねることで、今では障害のある方が働き、経済的に自立し、社会で活躍することが自然なこととして受け入れられるようになりました。

企業の側でも、障害特性に応じた職場環境の整備や、ジョブコーチ資格を持つ社員の配置が進んでおり、重度障害の方にも企業就労の道が広がっています。

福祉の基本理念は「互恵の精神」、すなわち〝お互いさま〟の心です。互いを尊重し合い、個人の思いや価値観を超えて、人と人とのつながりを育むことが大切だと考えます。「困ったときはいつでも相談してください」という姿勢こそが、悩みや不安を抱える方々にとって心強い支えになります。

私たちが掲げるテーマは、「障害があっても人生の可能性を信じてください」です。

近年は、ICTやデータベース、生成AIなどの新しい技術の発展、そして企業でのジョブ型雇用の拡大によって、障害のある方が自分らしい働き方を選びやすい時代になりました。福祉への理解も広がり、挑戦の場は確実に増えています。

実際、NHK主催の「障害福祉賞」では、私たちの利用者の方が2年連続で佳作及び最優秀賞をいただきました。自宅からオンラインでメタバースやデザインコンテンツ制作に励む姿勢が高く評価されたものです。

私自身、27年前に喉頭がんで声を失い、発声機能障害者になりました。それでも「ぷろぼの」を設立し、多くの皆さまのご理解とご支援をいただき今日まで活動を続けてこられました。

これからは、文化やスポーツを通じて地域福祉のさらなる向上に取り組み、誰もが安心して暮らせる地域社会づくりに尽力してまいります。

※障がいの表記について：本コラムは著者の表記を尊重しています

CONTENTS

表紙写真　第26回ヤマト福祉財団小倉昌男賞受賞者の久保田静子さん（左）と小淵久徳さん（右）。日本工業倶楽部にて

03 ヤマト福祉財団の原点に立ち返る
初代理事長 小倉昌男氏が私たちに託した思いとは

09 第26回ヤマト福祉財団小倉昌男賞贈呈式
年齢や方法は違っても利用者さんの幸せを願う二人の想いは同じく熱い

15 **2026年度ヤマト福祉財団助成金決定**

16 助成先レポートVol.53
（NPO）ともいき キッチンみらいず
戦略的リニューアルで守る「作りたい」が力に変わる場所。

18 挑戦は確信に！自然栽培パーティ 10年の歩み
福祉×自然栽培が編みだす共生社会に向かって

20 **地域とつながるボランティア**
農業編 地域福祉活動編

22 2026プレ開催　**彩ジョブ おしごと発見フェア**

23 スワン工舎卒業生訪問 42
働く職場を支えて 明日の自分を育てる

24 **研修・育成プロジェクト**

日本障害フォーラムが推進するイエローリボン運動に賛同しています。

巻頭企画

ヤマト福祉財団の原点に立ち返る

初代理事長 小倉昌男氏が私たちに託した思いとは

左から元ヤマト運輸社長秘書 岡本和宏さん、きょうされん専務理事 藤井克徳さん、山内雅喜ヤマト福祉財団理事長

ヤマト福祉財団の初代理事長 小倉昌男氏が逝去されて21年。いまやヤマトグループ各社での世代交代は進み、ベテラン社員でも小倉昌男氏と言葉を交わしたことがない方ばかりに。なかには名前しか知らない方もいます。

今回お集まりいただいたのは、当財団が障がい者福祉への支援活動をどう進めていくかなどの基軸を小倉昌男氏と二人三脚で築かれたきょうされん専務理事の藤井克徳さん。そして、小倉昌男氏がヤマト運輸の社長当時、秘書を務められた岡本和宏さんです。書籍などには記されていないお二人しか知らない小倉昌男氏とのエピソードなども交え、存分に語っていただきました。

シンポジウムコーディネーターの藤井さん(左)と小倉理事長(右)

「障がい者施設経営学入門」と題したオープニング講演(2003年)

セミナータ食会場で

開会の挨拶をする高田三省常務理事(右)(2001年)

等身大の小倉昌男氏に長年寄り添い続けたお二人

山内理事長(以下、理事長)　本日はお忙しい中、ありがとうございます。お二人は、当財団の初代理事長の小倉昌男さんと長年行動を共にし、私たちが知り得ないお人柄やエピソードなどもよくご存知です。それをぜひざっくばらんにお話しいただいて、小倉昌男とはこういう人だった、こんな思いを込めて当財団を開設した、さらに未来に託した願いなども、読者のみなさんにお伝えし、共有することができたらと考えています。

見る人の立場でイメージがまったく違う人だった

岡本和宏さん(以下、岡本)　私は小倉さんがヤマト運輸の社長を務められていたとき、11年間秘書としてずっと側にいました。でも財団を設立された当時の話などは、あまり詳しくありません。

理事長　長年秘書を務められてきた岡本さんしか知り得ない人間・小倉昌男をぜひ語ってください。

岡本　そういうことでしたら、お話ししたいことはたくさんあります(笑)。

小倉さんから受ける印象というのはその人の立場によって、まったく変わると思うんです。例えば、宅急便のネットワーク構築を開始しようとしたとき、路線免許を出さないのは行政の怠慢だと、運輸大臣を提訴したでしょう。マスコミはこぞって小倉さんは強面の人だと報道したけど、私は小倉さんの近くにいて違う面をたくさん見て来ました。私にとっては、優しくてとてもユーモアのある人という印象が強いです。

「障がいのある人のためになんにでも使ってください」

藤井克徳さん(以下、藤井)　私も最初にお会いしたとき、報道とはイメージがまったく違うと驚きました。

理事長　財団が設立して2年ぐらいしたあと、藤井さんと出会ったと聞いています。

藤井　私と小倉さんの本格的な出会いは、1995年の阪神淡路大震災です。この震災で小規模作業所と呼ばれていた無認可作業所が30数ヵ所も壊滅状態になりました。私たちは大阪に前線基地を設けて、毎日支援に入っていましたが、そこに突然、高田三省さんが現れたんです。

岡本　高田三省さんは、財団を設立する際、小倉さんが日本トラック協会から、本財団の常務理事にスカウトされた方で、まさに信頼する相棒という存在でした。

藤井　その高田さんが「これは小倉から託された小切手です。どうぞ何にでも使ってください」と、300万円も置いていかれたんです。震災ではいろんな財団から寄付をいただきましたが、この備品を買ってほしいとか、使途は全部限定されていました。

理事長　目的が指定されていたと。

藤井　何でも構わないと言われたのは初めてで、ひょっとしたら何か魂胆があるのかもしれないと、当時の副理事長が不安に思い私に相談して来たんです。それで高田さんに連絡し「このお金を本当にもらっていいんでしょうか」と確認しました。すると「何に使ってもいいから、とにかく障がいのある人を助けてあげてほしい」と伝えられ、思わず感動しました。

理事長　藤井さんたちなら信頼できると見抜かれていたのでしょう。

岡本　震災という非常事態だから、どうぞご自由にって、小倉さんのポリシーを象徴していますね。

君たちは福祉で、私は経営で互いに世の中に役立つことを

藤井　とにかく直接お礼を言いたいと、私は震災から3ヵ月ほどして財団を訪ねたのですが、小倉さんは、私と会うために結構長い時間を取ってくれていたのです。

そのときは「今回の震災で私は小規模作業所というものを初めて知った。何か応援をしたいが、福祉のことは精通している君たちがやった方がうまくいく。では自分にできることは何かないか。事業所の経営について

だったら、何かできるかもしれない」と話されたんです。

岡本　小倉さんは、餅は餅屋だという考え方を持っていました。だから経営のことなら俺の出番だと、考えたんじゃないでしょうか。

理事長　自分の持っているものを世の中に活かしたい、役に立てることは何でもやっていきたいっていう想いは、ヤマト運輸そのもののあり方と相通じますね。

藤井　さらに驚いたのは、動きの速さです。既に小倉さんの中にはセミナー構想があったとは思うんですけど、その年の秋には、全国の福祉事業所に声をかけて2泊3日のパワーアップセミナーの実現に向けて段取りするようにと指示を受けました。

理事長　宅急便と同じように、こうと決めたら迅速に動く、そこがまた小倉さんらしいところですね。

講演で飛び出した「やればわかる」の名言

藤井　小倉さんは、日本中の会場に足を運び講演をされました。私は、きっとヤマトの経営展開や足跡とか宅急便の話をするのだろうと想像していたんですが、そんな話は一切出てきません。話されたのは、自分の経営の基本姿勢だけです。

理事長　ご自身の功績には触れず、考え方などを伝えたと。

藤井　その中でしきりに言われたのが「やればわかるという」名言です。セミナーのあと「藤井君は理解できた？」って問いながらこう教えてくれました。

「要するにとにかくやってみること。成功したら自分の立場に自信を持てる。だがもっといいのは失敗することだ。むしろその方が学びは大きい。やらないことが一番ダメだ。やればどっちに転がっても、結果が出てきて、それが自分の血肉になっていくんだよ」と。これをうまいこと言いながら話されたのを今でも鮮明に覚えています。

理事長　小倉さんの経営哲学にも通じるお話だと思います。

人知れず頑張っている者 若い人への思いやり

藤井　セミナー開催準備でも忘れられないエピソードがあります。小倉さんは、宿泊型のセミナーにしないと本当のお付き合いは深まらないと言うんです。しかも参加者の宿泊先をよりグレードの高いホテルに、夕食も一流シェフの料理にしたいと、メニューを一つひとつ確認するほどでした。私がこれでは予算をオーバーしてしまうと話すと、日頃、我慢し苦労して頑張っている職員さんたちを労ってあげたいじゃないか、とガンとして譲りませんでした。

岡本　私がニューヨーク支社に勤務していた時期があるのですが、当時、社長になられたばかりの小倉さんが、出張でニューヨークへにこられました。

理事長　宅急便のヒントを得るための渡米ですね。

岡本　そこで宅急便を成功する確信を得た小倉さんは上機嫌になり、マンハッタンに食事に行こうと私たちを

a personal story

個人的な話で恐縮ですが…

私が入社できたのは小倉さんのおかげです

岡本さん

私がヤマト運輸の採用面接を受けたとき、つい熱くなり当時の国際政治について持論を延々と展開してしまったんです。面接官たちはみんな呆れ顔になりギロリと睨みつける人も。あっこれはダメだ、落ちてしまったと思いました。でもその中にいた若くてハンサムな方だけはニコニコと笑って聞いてくれていたんです。入社したあとにそれが小倉さんだと、やっと気付き、心の中で深く感謝しました。

社会的に立場の弱い人を助けることが自分の使命だと固く信じていた

きょうされん 専務理事　藤井 克徳さん

経営者としては強面でも ユーモアと茶目っ気のある 人間味にあふれた方でした

元ヤマト運輸社長秘書　岡本 和宏さん

誘ってくれました。でもレストランに着くと支社長に、君は帰っていいよと言い出して、若い私たち社員だけで小倉さんと食事をする羽目になったんです。

藤井　羽目ですか（笑）

岡本　小倉さんはにっこり笑うと「だって上司がいたらさ、言いたいことも言えないだろ」って。そういう気遣いをしていただける方でした。

理事長　私も他の社員も厳しい経営者としてのイメージが強いですよ。だからエレベーターが開いて小倉さんが乗っていると、誰も乗ろうとしない（笑）。

岡本　その雰囲気は、ニューヨーク支社から帰って来てわかりました。私は戻ったばかりで知り合いが少なく一人で食堂にいたんです。それに気づいた小倉さんが「おっ、岡本くん帰って来たか」と気さくに声をかけてくださって。そしたら誰だこいつは？と、周りに警戒されてしまいました。

障がいのある人たちの現実を見てスイッチが入った

藤井　とにかくヒューマニズムにあふれた正義感の強い方でしたね。

理事長　それを実感されたのは？

藤井　小倉さんに、障がい者福祉の現場を見にいきたいと言われ、都内の作業所や僕がかつて勤務していた特別支援学校を回ったときです。

岡本　小倉さんは、現場主義の人。本当の知識を得るには、現場からと徹底されていました。

藤井　「この作業所ではいくらお給料を出しているの？」と聞くので1万数千円ですと答えました。

すると「1日に？」と聞き返すので、月々ですと伝えると、えーっと考え込んでしまって。そこでスイッチが入ったみたいなんです。

理事長　それが「1万円からの脱却」に繋がっていったわけですね。

藤井　また、小倉さんは精神病院を

見て物凄くショックを受けていました。精神障がいのある方が鉄格子のある部屋に閉じ込められ、ジャラジャラと鍵を持った職員が病棟の鍵をかけてまわる。

理事長　閉鎖病棟ですね。

藤井　それが、模範となる国立精神・神経医療研究センターであることにとても驚かれたのです。この点でも心を揺さぶられたに違いありません。

モラルに反することは許さない経営者としても正義を貫く人

理事長　正義感の強さは、経営としての気質にも現れていましたね。

岡本　人や商業道徳の道を踏みはずす行動は絶対に許さない方でした。社長になられた当時、現場はある百貨店の担当者からいつも無理難題を押しつけられていた。それを知り、これは商業道徳に反すると、それまで経営の柱であったその配送業務から撤退することを決意したんです。

小倉さんは先代から言われたことも、理に敵わないことは絶対受けないという人でした。

理事長　現場を第一に考える方でしたからね。常にお客様が喜ぶことを考えなさいと教えられました。

岡本　ただ、いま考えると当時は宅急便が軌道に乗り掛けた時期で、それに一本化していくチャンスだと考えられていたのかも。一番の儲け頭を切ることで、背水の陣で宅急便に賭ける雰囲気を社内に作ろうとしたのかもしれません。

理事長　そうですね、小倉さんは本質を見抜く力をお持ちでしたし、そこから生まれるひらめきを大切にされていた。理論的かつ大胆に判断を下す方でしたからね。

岡本　でもね、経営者にとって一番大切な資質は、ネアカなことだとも話していましたよ。ネアカな人は、世の中をプラス思考で考えるので、成功する人が多いんだそうです。だから経営者はネアカでなくてはいけないと。

理事長　そんな小倉さんの哲学を綴られた「小倉昌男　経営学」は、いまも経済界で長く愛読されています。

藤井　でも最初は、本は書かないって嫌がっていたんですよ。

理事長　そうだったんですか。形に残していただいて良かった。私たちには、いまも軸がぶれないための大切な羅針盤となっています。

意外なお茶目な一面も自分をひけらかしはしなかった

藤井　小倉さんは好奇心旺盛で多彩な方でもありました。義太夫や文楽にも関心があり、藤井君は目が見えないけど、全部聞けばわかるからと自身が出演された新橋演舞場にも誘っていただきました。後日、感想を聞かれ、そこでも義太夫をうなるなど、お茶目な側面もありました。

岡本　じつはね、秘書課の伝説っていうのがあるんです。ある日、小倉さんが女性秘書に「明日テレビの取材が入ったから、君もテレビに映ると思うよ」と伝えた。彼女は急いで美容院にいって、張り切って出社したわけです。ところが取材なんてなかった。その日は4月1日だったんです。以来、

a personal story

個人的な話で恐縮ですが…

私の目を治したいと渡米費も用意してくれていた

藤井さん

私の目がどんどん悪化していったとき、小倉さんは何とか治す方法がないかといろいろ調べてくれたみたいなんです。でも私の目の病気は医学上ではどうにもならないものでした。高田三省さんから「アメリカで手術をすることはできないの。小倉さんは相当お金をかけるつもりだよ」と言われ、思わず涙が溢れました。そこまで真剣に思ってくれているんだと、本当に嬉しかったです。

福祉の世界に貢献できる道筋を作っていただけたのは社員にとって幸せなことだと思う

ヤマト福祉財団理事長　山内 雅喜

エイプリルフールが近づくと、秘書課の連中は、今年は誰が犠牲者だって身構えていたそうなんですよ。

理事長　他にも何か意外な一面を伝えるエピソードはありますか？

藤井　パワーアップセミナーでは、日中の講演のあと夜にはホテルの一室に有志が集まり自主勉強会を開くのが通例でした。そこに小倉さんは、浴衣姿で参加されるんです。あるときは、受講生を誘ってカラオケに行ったときもあります。カラオケは好きなようで、東京でも何度かご一緒しました。十八番は「有楽町で会いましょう」でした。

岡本　フランク永井ですね。今の若い人は知らないでしょうけど（笑）。私が思い出すのは、晩年小倉さんが高齢者施設に入られたと聞き、スワンベーカリーのパンを持ってお見舞いに行ったときのことです。

理事長　岡本さんは秘書を務められた後、スワンで販売などの業務に就かれていましたね。

岡本　赤坂店には小倉さんにお世話になった創設時からのメンバーもいたので一緒に出かけたんです。成長した姿を見てもらいたくてね。小倉さんはとても喜んでくれて、施設の皆さんにパンを配り始めました。私たちも一緒に配りながら、みなさんと話をしたんですけど、誰も小倉さんがヤマト運輸の社長だったとは知らなかったんです。

藤井　ご自身の功績とかをひけらかしたりしない方でしたね。障がい者福祉に頑張って来た方に財団から賞を贈ろうとなったときのことです。今でこそ「小倉昌男賞」とその名を冠していますが、当時、私たちは小倉さんの名前を入れた賞にしようと言ったのですが、頑なに拒否されました。それで、最初は「ヤマト福祉財団賞」になったんです。

理事長　そんな経緯があったんですか。価値観の軸が、じつにはっきりされた方でしたね。

小倉昌男氏が、これからのヤマト福祉財団に願うこととは

理事長　本財団の活動も30年を越えましたが、もしも小倉さんが目の前にいたら何と言われるだろうかと、ふと考えることがあります。お二人はどう思われますか。

藤井　財団の主な目的は、障がいのある方が働き、高い給料を得て社会的に自立することにあります。福祉事業所では生産性を上げるためライン化なども進めていますが、そればかりで良いのでしょうか。小倉さんは、障がいの重い方たちのことをもっと勉強したいと話していましたが、課題にしたまま亡くなられてしまいました。これは日本中が、いえ人類が解決すべきテーマかと、私は思っています。

岡本　小倉さんは、全財産を投じてヤマト福祉財団を設立されましたが、その理事長職を、運輸省の役人やヤマト運輸の役員などの天下りポストに絶対してはいけないと話していました。それは誰のための、何のための財団なのかを見失ってほしくないからだと思うのです。山内理事長は、おそらく小倉さんと直接触れ合うことができた最後の世代だと思います。今後も小倉昌男のスピリッツを継承し続けるのは大変だと思いますが、決して忘れないでほしい。それをお伝えしないと小倉さんにあの世で会わせる顔がないと、今日はやって来たんですよ（笑）。

理事長　小倉さんが、ヤマトグループを辞められるとき「変わるべきものと、変わらべからざるもの」があると話されました。時代とともにいろんなものが変わっていくけれど、世のためになること、人のためになること、会社は社会の公器なんだからそこをぶらさないでほしいと。そんな小倉さんの意志をヤマト福祉財団もしっかりと継承し続けていくつもりです。「障がいがある人もない人もみんなが幸せになっていく」その基本は変わらずにつないでいかなければならない、そう改めて痛感しています。

岡本　それを聞いて安心しました。小倉さんのお話でしたらいつでも喜んでお伝えに伺いますからね。

藤井　まだまだエピソードはたくさんあります。

理事長　ぜひまたお願いします。そのときは、フランク永井でも一緒に歌いましょう（笑）

第26回
ヤマト福祉財団
小倉昌男賞贈呈式

年齢や方法は違っても利用者さんの幸せを願う二人の想いは同じく熱い

前列左から小淵様令夫人 美智子さんと受賞された小淵久徳さん、受賞された久保田静子さんと、久保田さんを長年支える同僚の渡邉千加子さん。

Youtubeでライブ配信した贈呈式の様子はここからご覧いただけます

受賞者に贈呈された正賞 雨宮 淳氏作のブロンズ像、賞状、副賞 賞金100万円の目録

「小倉昌男賞に込められた想いを胸にこれからも頑張ります」と久保田静子さん(左)と小淵久徳さん

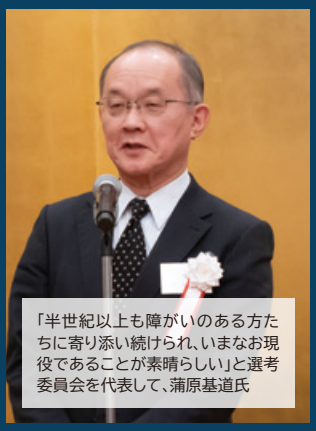
緊張した受賞者の心をほぐすように参加者から温かい拍手が

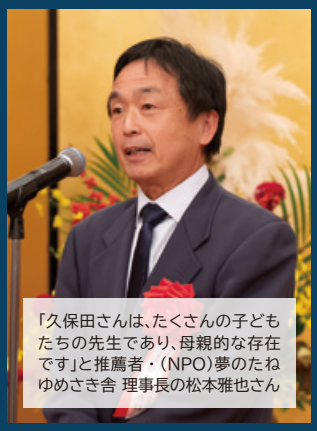
障がいのある方の仕事づくりや雇用の拡大、労働環境の向上、高い給料の支給などに功績のある方を称え、今後のさらなる活躍を応援したい。ヤマト福祉財団小倉昌男賞には、そんな想いが込められています。

第26回の贈呈式は、障害者週間の12月4日に開催しました。厳正な審査のもとで選考された2名の受賞者は「特定非営利活動法人わかば福祉会 理事長の久保田 静子さん」と「社会福祉法人ゆずりは会 理事であり、菜の花 管理者の小淵久徳さん」、年齢が倍も違う方の同時受賞は本賞では初めてです。

そんなお二人と一緒に喜びをわかち合いたいと、会場となった日本工業倶楽部(東京都)には、両名の関係者や歴代受賞者約120名が集いました。

「本当にみなさんのお陰です。どんなにお礼を申し上げても言い尽くせません」と久保田静子さん


「半世紀以上も障がいのある方たちに寄り添い続けられ、いまなお現役であることが素晴らしい」と選考委員会を代表して、蒲原基道氏


「久保田さんは、たくさんの子どもたちの先生であり、母親的な存在です」と推薦者・（NPO）夢のたねゆめさき舎 理事長の松本雅也さん

地元に根付いた二人の活動を福祉のモデルとして全国へ

山内理事長は主催者挨拶で「特殊学級の教師だった久保田静子さんは、障がい者である教え子たちの将来を案じ、昭和44年に私財を投じてわかば学園を設立しました。以来56年間、時に優しく時に厳しく母親のような愛情を注ぎ、多くの利用者さんたちの社会的な自立を支え続けています。奇しくも小倉昌男初代理事長は久保田さんと同じ年。きっと同級生の受賞を喜んでいることでしょう。

小淵久徳さんは、農福連携の第一人者です。福祉も農業もゼロから学び、機械化や利用者の特性に応じた作業分担などで工夫を続け、生産量を飛躍的に増大させ高工賃を実現しました。そのノウハウを、本財団が開講する農福経営実践塾で多くの塾生たちに伝えてくれています」と紹介しました。

選考委員の日本社会事業大学学長室 社会福祉研修センター 蒲原基道客員教授は、お二人が地域と一体となって事業を進めて来た点も高く評価しています。「久保田さんは、長年障がいのある方に寄り添いながら、仕事やグループホームを作り、生涯にわたる支援を実践されて来ました。その姿は、地域の方たちを動かすきっかけとなっています。小淵さんは、地元農家と力を合わせ、農福連携という新たな分野を成功させました。また、障がいのある方一人ひとりの特性を理解し、作業とマッチングさせて高い給料を支給しています。そんなお二人は、全国の福祉施設にとって最高のモデルと言えるでしょう」と選考理由を伝えました。

どんなに辛い状況でも教え子のため前向きに

「久保田さんが本賞を受賞でき、やっと広く世間が彼女を評価してくれたと、胸がスッとする思いです」と話すのは、久保田さんの推薦者（NPO）夢のたね ゆめさき舎の松本雅也理事長。

「1960年代、久保田さんは兵庫県で初となる共同作業所を開設します。当時は助成金など何も整っていません。だから資金繰りに悩み役場に相談に行っても〝別に私たちが頼んだわけじゃない〟と冷たくあしらわれることも。それでも挫けることなく、休日どころか給料すらなくても教え子のためにひたすら働き続けて来た久保田さん。そんな彼女の姿に周りも感動し、一緒になって事業を支えてくれるようになりました。今や加古川市で彼女の功績は広く知られ、バザーを開くと一万人くらいが来場するんですよ」と嬉しそうに話します。

利用者さんを信じているから迷うことなく挑戦できる

小淵さんの推薦者は、千葉大学園芸学部食料資源経済学科の吉田行郷教授です。

「以前、ゼミ生を連れて彼の施設を訪れたとき、機械が多いことに驚きました。どれもネットオークションで安く購入した中古品ですよ、と笑っていましたが、福祉施設でこれだけ農業の機械化を進めた所は見たことがありません。彼は良いと判断したら迷わないし、仕事を増やすことも躊躇しない。それは何より利用者さんの力を信じているからです。そんな彼を見つける

と、利用者さんは、小淵さん！と呼びかけて来る。それだけ彼のことが大好きなんですね。後日、ゼミ生たちが感銘を受けて書いたレポートには〝福祉施設で珍しい認定農業者。農福連携で農家の後継者問題を解決。子ども食堂など企業と連携し社会貢献〟と三者三様のテーマになっていました。つまり彼の活動は従来の福祉の枠に収まらず広がり続けている。しっかり環境を整えれば、福祉施設は農業でこれだけ成功できることを、彼が証明してくれたのです」と解説しました。

受賞の喜びを次のステップに

続いて山内理事長が、お二人に正賞の雨宮淳氏作のブロンズ像「愛」と賞状、副賞賞金100万円の目録を、受賞者を支え続ける方たちには花束を贈呈。来賓代表の厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部 野村知司部長からは「私たちも障がいのある方の生きづらさをなくし長く働き続けられる、そんな地域共生社会の実現に努めます」との祝辞が届きました。

そしてフィナーレである両受賞者の挨拶へ。「百歳を迎えましたが、これからも障がいのある人たちが、みんなと同じように幸せになるよう努力したいと思います」と久保田さん。小淵さんは「たくさんの人との出会いに恵まれ、ここに立つことができました。これからも利用者さんのために挑戦を続けます」と感謝の気持ちを伝えました。

祝賀会では、乾杯の音頭をヤマト運輸(株)阿波誠一代表取締役社長が、中締めの挨拶はヤマトグループ企業労働組合連合会の森下明利会長に務めていただくことに。さらに、受賞者の関係者から温かいお祝いのメッセージも贈られ、晴れの日に花を添えてくれました。

「近隣農家さんは、さりげなく私たちの仕事ぶりを見守ってくれています。それがとてもありがたいです」と小淵久徳さん

「農業で高工賃を実現できると全国の福祉施設に勇気を与えてくれています」と推薦者の千葉大学園芸学部食料資源経済学科の吉田行郷教授

利用者さんも地元の方も「先生」と慕う百歳の現役理事長

特定非営利活動法人わかば福祉会（兵庫県加古川市）

久保田静子さん

11月25日、百歳になられたいまも毎日わかば学園で利用者さんたちの仕事を指導されている久保田さんにお話を伺いました。

「朝、事業所の窓を開けると気持ち良い風が入って来て、今日もみんなで頑張りましょう、と元気になるんです」と久保田さん

地域の人たちが協力して改築した最初の作業所（1969年）

大好きな子供たちのためにいま私がやらなければ

1969年、加古川市の小学校で特殊学級の担任を務めていた久保田さんは、教職を辞してわかば学園の開設に踏み切ります。

「明るい人気者だった子が、中学卒業後まったく外に出なくなりました。青白い顔をして一日中ぼんやりテレビを眺めている。話を聞くと、就職はできないし、どこにも行くとこなんてないんや、とつぶやくんです。この子たちの居場所をなくしてしまったら絶対あかん！と思いました」

いまやらなければ後が続かない、と動き出した久保田さんを特殊学級の先生や障がい者児童の親の会、そして地元の慈善団体などが応援します。力を合わせ農作業小屋の床を張り替え、トイレとキッチンをなんとか設置。わずか5畳の作業所に5人の園生が集い一歩を踏み出しました。

みなさんの助けがあったからどんな苦難も乗り越えられた

仕事はクッキー作りから始めましたが売上に結びつかず、利用者さんの給料はほとんどありません。久保田さんは、毎日懸命に地元の喫茶店や生協などに売り込みを続けました。

無償・無休で働き続ける姿に地域の方も心を動かされ「工場を閉めるからうちの活版印刷の機械を使ったらいい」と言う方が現れます。こうして始めた印刷業で名刺、挨拶状、年賀状の仕事を受注。作業所は次第に軌道に乗っていきます。

それでも久保田さんは手を休めず親御さんと協力し駄菓子、雑貨などの製造販売も開始。やがて二千円、五千円と給料を支払えるようになり、利用者さんは仕事の喜びを覚えていきます。

ところが1979年、作業所が立ち退きを命じられることに。「みんなと離れたくない」と泣く子どもたち。久保田さんの私有地に事業所を建てることにしましたが、資金がまったく足りません。すると近隣の大工さんたちが、古くなった住宅などの木材や窓枠、瓦などをかき集め、無償で事業所を建ててくれたのです。

「私はいつもいろんな方に助けられて来ました。だから苦労したなんて思ったことは一度もありませんよ」

いまも昔も厳しいけど優しい久保田さんは、永遠の先生

事業所には、たくさんの利用者さんが入って来ました。

久保田さんは、みんなが楽しくいろんな仕事ができるようにと心を砕き、走り回って地域の方の協力を得ながら、農園、菓子工房、喫茶店と仕事場を広げていきます。さらに自立して暮らせる生活の場を、とグループホームも設立しました。

まさに障がいのある方の生涯にわたって寄り添い支援する久保田さんの活動は、半世紀を超えた今も変わることなく続いています。

毎朝、事業所に顔を出すと「先生、おはよう！」とみんな元気に声をかけてきます。開設当初から通い続ける方は「いまも昔も変わりなく、厳しいけど優しい先生」と話してくれました。

「みんなここに来てから顔つきが変わってきたんですよ。一人ひとりと大切な思い出があるし、いい一生やったなあと思っています」

何をおっしゃいますか久保田先生、教え子たちとの物語はまだまだ続いていきますよ。

地元農家に認めて いただくこと それが農福連携の第一歩

社会福祉法人ゆずりは会 菜の花（群馬県前橋市）
小淵久徳さん

11月6日、ホテル、農協と職歴を経てまったく未知の福祉の世界に飛び込んだ小淵さんが管理者を務める菜の花を訪ねました。

「記録を取り続けて栽培計画を立てれば、収穫量・品質を高め、作業の無駄をなくすこともできます」と小淵さん

農業と福祉のプロへ 1からとことん叩き込まれた

「アビリンピック※のボランティアで出会った障がいのある方のまっすぐな心に魅かれ、ゆずりは会の扉を叩きました」と小淵さん。採用面接は農業と福祉に精通した前理事長でした。そこで「障がいのある方と農業の親和性は高く、工賃アップにもつながる。君には、農業と福祉のプロになってほしい、と言われ、正直かなり戸惑いました」

すべてに初心者だった小淵さんは、日々土と汗にまみれながら、農業のイロハを1から叩き込まれます。

やがて新事業所・菜の花が開所し、事業所の運営が軌道に乗り始めたタイミングで小淵さんが管理者に。でもどうやって農業で収益を伸ばすのか、どうすれば利用者さんが活躍できるのか、まったくわかりません。

職員の気持ちを一つにまとめ 利用者さんを適材適所に

「何とかしなければと、ヤマト福祉財団の実践塾に申し込んだのです。そこで熊田塾長に〝農業にはたくさんの仕事がある。利用者さん一人ひとりをしっかり見つめれば、その人に合った作業がきっと見つかります〟と教えていただきました」

早速、農作業を細かく分解し、利用者さんの特性・能力に合わせた仕事の振り分けを開始します。

「大切にしたのは、利用者さんとコンセンサスを取り、各人のやる気、能力を引き上げていくことでした」。

しかし職員のなかには〝いままでの内職などの仕事をやめ、農業一本に絞ってやっていけるのか〟と不安になるものもいたと思います。

「夏野菜の売上が少ないときは冬野菜でカバーする、年間の栽培計画をたて、PDCAを回しみんなで考え実践したんです。成果が現れると職員の目標に向かうベクトルも一つになりましたよ」

農地と平均月額給料を 4倍にしたノウハウを全国へ

そんな姿を見た周囲の農家から、うちの土地を使ってくれないか、と声がかかります。そこで、法人の方針でもある機械化を全面的に推進することにしました。

「農業機械は、特化したものばかりなので、必要な作業に適したもの、利用者さんに使えるものを選ぶことが大事です。たとえばホウレンソウの種蒔きは半日かかっていましたが、機械化で約1時間に。金銭的には助成申請したり、中古品を安く購入するなどいまも工夫し続けています」

入塾時、農地は4ha、売上は350万円、平均月額給料は約2万6,000円でした。それが現在、農地は16haに拡大し、売上は3,900万円、平均月額給料も9万8,000円を超えるまでになりました。

「その人の仕事量だけでなく、どう努力したかの過程も大切に評価しています」と小淵さん。給料とともに利用者さんの意欲もアップ。働く姿を見れば、どれだけいまの仕事が楽しく、やりがいを感じているかは一目瞭然です。法人として認定農業者にもなることができ、菜の花としてノウフク・アワード2022のグランプリにも選ばれ、ユニバーサルな農業モデルとして全国から注目されています。

「地元の農家に認めていただくことが、農福連携の第一歩です」と話す小淵さんは、自ら培ったノウハウを農福経営実践塾の塾長として惜しむことなく塾生たちに伝えています。

※障がいのある方が日頃培った技能を競い合う「障害者技能競技大会」。地方、全国、そして国際大会と展開します。

受賞の言葉

周りの方たちと同じ幸せを彼らが味わえる日まで

特定非営利活動法人わかば福祉会 理事長
久保田静子さん

明石女子師範学校卒業後、1943年 別府町立国民学校に赴任。1961年 加古川市立別府小学校特殊学級を担任、障がい児との関わりが始まる。1969年 わかば学園開園、5～6名の利用者さんとクッキー製造販売、印刷業、駄菓子・文具などの販売を行う。1979年 私有地を提供しわかば学園を現在地(加古川市尾上町養田)に移転。利用者は20名以上になり、農業や菓子工房などを展開。2008年 NPO法人わかば福祉会設立し、翌年指定障害者福祉サービス事業 就労継続支援B型に移行。2009年からグループホームを設立し現在2ヵ所に。2016年 兵庫県高齢者特別賞受賞。2019年に公民館に喫茶店をオープン。創立50周年記念式典を開催。

ライブ配信を見ている仲間の感想を聞くのが楽しみ

こんな素晴らしい賞をいただけるなんてもったいない。こうして私が長年やって来れたのは、利用者の親御さん、地域のたくさんの方々の熱意、応援があったからこそです。

また、これまで50回以上バザーを開いて来ましたが、その度に多くの方に集まっていただきました。すべてのみなさんに受賞のご報告と感謝の言葉をお伝えしたいと思います。

そして校長を務めてくれていた亡くなった主人にもありがとうと伝えたいです。うちの玄関には、たくさんの実をつけるシークワーサーがありますけど、この木は「主人の木」と思って植えたものなんです。今朝も「東京へ授賞式に行って来ますよ」と報告してから家を出ました。

これまでを振り返るといろんなことがありましたが、すべてが楽しい思い出です。たくさんの教え子に囲まれ、多くの方に応援をいただけてきたお陰ですね。

開所したころから世の中は大きく変わりましたが、目指すものは変わりません。私はうちに来る人達みんなが本当にかわいくて、障がいの有無に関係なくみんなが幸せになれるように、私はもっと勉強せんといけません。この歳になると覚えるのも大変ですが、少しでもお役に立ちたいと思います。

受賞の言葉

一人ひとりがきちんと役割を果たしてこそ、農業は成り立つ

社会福祉法人ゆずりは会 理事
菜の花 管理者 **小淵久徳さん**

1997年 東北学院大学経済学部経済学科卒業。株式会社群馬ロイヤルホテル入社、1998年退職し、粕川村農業協同組合に入職、金融および共済業務に従事。2009年 前橋市農業協同組合へ統廃合。2010年 退職し、群馬県高崎産業技術専門校インテリア木工課に入学(～2011年卒業)。2011年 社会福祉法人ゆずりは会入職。2016年 社会福祉法人ゆずりは会 菜の花 管理者。2017年 社会福祉法人ゆずりは会 理事に就任。2022年、ノウフク・アワード2022 グランプリ受賞。現在、一般社団法人農福連携自然栽培パー ティ関東ブロックリーダー、農福連携特例子会社連絡会オブザーバー、大隅半島ノウフクコンソーシアム アドバイザー、ノウフクコンソーシアム東日本 副会長を務める。

私を支え協力してくれるすべての仲間と妻に感謝

本賞をいただき、改めて噛み締めているのは、私と一緒に頑張ってくれている職員や利用者さん、そして私を自由に働かせてくれている妻への強い感謝の気持ちです。

そして、ブロンズ像を手にし、その責任の重みもずっしりと感じました。まだ若輩者でありますので、本賞に負けないようにこれからも努力し続けていきます。

農業にはいろんな仕事がありますが、そのなかから利用者さん一人ひとりが自分にできる作業を担当し、力を合わせることで農業はやっと成り立ちます。機械を扱う仕事は、花形みたいに見えますが、ブロッコリーの枝を一つずつ落とす地道な仕事も農業には重要です。そんな作業をコツコツと積み上げてこそ、ブロッコリーを一つ200円で売ることができます。

それがわかると、利用者さんも自分の仕事に誇りとやりがいを持ち、さらに次の仕事をと頑張っていけます。やっぱりみんなで一緒にやることが一番大切ですね。

こうしたことを、10年前に熊田塾長から教えていただきましたが、自ら実践し体験して、初めてその真意を理解できました。塾長という立場になり、今度は私がいろんな体験を通して上手く塾生たちに伝えていきたいと考えています。

2026年度ヤマト福祉財団助成金決定一覧

（助成総数：43件　助成金額合計：1億1,946万円）

1．障がい者給料増額支援助成金（助成数：33件　助成金額：1億951万円）

単位（万円）

所在地	福祉事業所・団体名	助成金の使途	助成金額
北海道岩内郡岩内町	サンライズ	急速凍結庫・ディープフリーザーの購入資金	265
青森県弘前市	アイツーリンク	3Dフリーザー、真空包装機、冷凍ストッカーの購入資金	500
宮城県仙台市泉区	仙台ローズガーデン	厨房改築・充填機等購入資金	500
福島県伊達市	工房ひろせ	ぶどう栽培農薬散布スピードスプレーヤー整備事業資金	200
茨城県守谷市	もりや工房くくるB型事業所	移動販売車と車内コールドショーケースの購入資金	155
群馬県渋川市	シャローム	サツマイモ栽培機械および加工設備購入資金	500
埼玉県上尾市	領家グリーンゲイブルズ	珈琲焙煎機の購入資金	369
千葉県千葉市緑区	就労継続支援はぁもにぃ	刈草搬出・運搬工程を効率化するために必須な4WDトラック（1.3トン車）購入資金	434
福井県鯖江市	鳥羽事業所	木工用CNC切削加工機の導入資金	390
新潟県新潟市東区	ワークセンターひがし	シュリンク包装設備(シーラーとシュリンクトンネル)の購入資金	92
長野県伊那市	アンサンブル伊那	マルチスプレーヤー資金	91
長野県上高井郡小布施町	社会福祉法人くりのみ園	飼料原料運搬のためのトラック購入資金	450
愛知県海部郡大治町	就労継続支援B型　やまもも園	封筒フィーダー付オンデマンド印刷機の購入資金	500
愛知県海部郡大治町	障害者就労継続支援B型事業所　chord	海苔カット機械の購入資金	252
愛知県春日井市	就労支援クッキングジョブズ	レトルト加工ができる機器、それに伴う機材の購入と設置資金	450
愛知県名古屋市中区	ぽかぽかワークス	高性能大型農業機械の購入資金	500
京都府乙訓郡大山崎町	こきゅう+	大型焙煎機の購入資金	312
京都府京都市北区	西陣工房	キッチンカーの購入資金	320
大阪府寝屋川市	小路北町作業所	カーペットクリーニングを行うための機材購入資金	200
奈良県奈良市	SCファームぷろぼの	自動専用ガット機器・手張り機器・バドミントンストリングス・ストリンガーズキッドの購入資金	294
和歌山県紀の川市	ソーシャルファームもぎたて	真空脱気ロータリーヒートシール機の購入資金	288
山口県防府市	ふれんず	システム炊飯器導入資金	136
愛媛県松山市	ほまれの家　松山店	業務用刺しゅうミシンの購入資金	482
愛媛県松山市	就労継続支援A型事業所フェロー Labo	業務用刺しゅうミシンの購入資金	149
高知県高知市	おしごと画楽	ガーメントプリンター購入資金	258
福岡県粕屋郡須恵町	ライフサポートSAKU	農産物加工・調理のための厨房設備（調理台・コールドテーブル、業務用冷凍庫、換気システム、ガス調理台、2層式シンク、手洗い場等）の購入・設置工事資金	300
福岡県福岡市早良区	早良BASE	人参洗浄機・人参選別機の購入資金	257
福岡県小郡市	ろーど	農業用機械の購入資金	450
福岡県北九州市八幡東区	株式会社TERRA-S	施設改修工事・衛生設備の購入資金	500
長崎県佐世保市	特定非営利活動法人佐世保自立支援センターチャレンジ	タオルフォルダーの購入資金	195
宮崎県北諸県郡三股町	えがおの里三股 就労継続支援A型事業所	小型レトルト釜・真空包装機の購入資金	362
鹿児島県薩摩川内市	おじゃったモールさつま川内館	トラクターの購入資金	300
鹿児島県大島郡龍郷町	あまみん	クレーン付き4WD2トンダンプの中古車購入資金	500

2．障がい者福祉助成金（助成数：10件　助成金額：995万円）

単位（万円）

所在地	福祉事業所・団体名	事業・活動名	助成内容	助成金額
宮城県仙台市青葉区	さぐる・おどる企画	“手話通訳つき「音楽を使わずに踊ろう」” 東北アウトリーチ事業	文化活動	100
神奈川県川崎市中原区	任意団体チーム　フランボネ	バリアフリー漫才	文化活動	100
東京都新宿区	医療機関の障害者雇用ネットワーク	夢を広げる翼プロジェクト	ボランティア活動	100
三重県松阪市	特定非営利活動法人TEAM創心	重度医療的ケア者のアートデザイン制作・販売事業	文化活動	96
大阪府大阪市中央区	合同会社Ledesone	おとなLDラボが取り組む 大人LDの「見えづらい困りごと」可視化プロジェクト	調査・研究	100
和歌山県新宮市	特定非営利活動法人 near	医療的ケア・重症心身障がい児者とその家族を対象とした絵画制作ワークショップ・展示企画	文化活動	99
福岡県福岡市東区	福岡ろう劇団博多	ゼロから創る宮沢賢治の物語	文化活動	100
福岡県福岡市博多区	特定非営利活動法人AIP	3Dプリンタでつくる生活自助具ワークショップ（全6回）	ボランティア活動	100
大分県大分市	一般社団法人日本デフビーチバレーボール協会	障がい児童へのスポーツ活動普及事業	スポーツ活動	100
沖縄県宜野湾市	特定非営利活動法人 沖縄県自立生活センター・イルカ	障害者の理解促進に係る映画上映会・トークイベント開催事業	文化活動	100

戦略的リニューアルで守る「作りたい」が力に変わる場所。

鹿児島一の官庁街に、経験ゼロながら自己資金と融資を元手に立ち上げた総菜店「キッチンみらいず」。5年前に助成金を活用して弁当店への業態転換を図りました。それはコロナ禍を乗り越え、次なるステージを目指す挑戦でした。

Data

NPO法人 ともいき キッチンみらいず（就労支援センターみらいず）
2021年度 障がい者給料増額支援助成金
時代に即応し、売上・工賃アップし続ける夢に向かったリニューアル
（500万円）
（使途）弁当製造数増量のための改装工事、および機材購入資金

キッチン奥に新設された「盛り付けスペース」。効率が格段に向上

キッチンの調理台はすべてステンレス製に。床も張り替え、自動水栓、包丁まな板殺菌庫、業務用食洗器などを整備、衛生面の向上も図った

退職から1年弱で待望の出店

羽が生えているかのように、棚に並べた温かいお弁当が端から消えていきます。電停「市役所前」を降りてすぐ、キッチンみらいずのランチタイムはいつも盛況です。

並びの市役所のほか、裁判所や教育センター、県立図書館などがひしめく官庁街に店を構えたのは2015年のこと。現在はお弁当の製造販売に軸足を移しましたが、理事長の山下俊介さんが2人の利用者と量り売りの総菜店をオープンさせたのが始まりです。

「11年間、特別支援教育をしてきたのですが、就職でつまずく卒業生を多く見てきました。教員をしながら福祉事業所を紹介してきたんですけど、なかなかつながらない。じゃあもう自分で立ち上げるかと」。

先生のいるところだったら行きますと言う教え子の言葉に決断し、山下さんは退職。就労支援を目的とするNPO法人の立ち上げと、職場づくりに奔走します。飲食業にすると決めたのは2人のうちの1人が、「もしやるなら飲食の仕事をしたいと言ったので、飲食に絞ってみました」（笑）。

経営は市主催の創業支援セミナーなどに学び、飲食業については山下さんが学生時代にアルバイトでお世話になった飲食店オーナーに相談してまわりました。

初日の売上こそ1万円に届きませんでしたが、周辺の競合店と被らないようにと選んだ量り売りスタイルは、ヘルシーさと選べる楽しさが喜ばれ、売上も次第に安定。調理に励む利用者も20名近くにまで増えました。

ピンチで露呈した生産力の限界

キッチンみらいずは2021年の夏、当財団

助成を活用して店舗外観も全面改装。お客様とスタッフの出入口（右のドア）を分け、路面販売も可能なショーケースを設置。ウッディーな外壁に差し色が映えた、入店しやすい店舗となった

日替わり弁当(580円)。この日の主菜は「ささみチーズフライ」

改装した店内。毎日5～6種類のお弁当とお総菜が並ぶ。温かいご飯をその場で盛り付けて販売

理事長の山下俊介さん

注文先へ配達します

週4日、市役所前広場での出張販売もすっかり人気が定着

の助成を活用して店舗の全面改装に踏み切りました。開店から4年を数えるころから鮮明となりつつあった、とある問題の解決のためです。

「ビュッフェ形式は、お客様の滞在時間が思ったより長く、お客様が外まで並び始めたんです。あきらめて帰られる姿もあって、取りこぼしも勿体ないし、お弁当という形も考えなくちゃいけないかなと…」。

チラシで知った楠元塾に飛び込み、弁当事業のノウハウを学び始めました。そんな折です、鹿児島にもコロナ患者が現れたのは。

量り売りはすぐさま中止し急遽、弁当販売に本腰を入れてシフト。すると調理場の狭さ、動線の悪さなど従来の店舗設計がネックとなり、製造個数の限界が見えてきたのです。

作業効率やHACCPの考えを採り入れて、衛生環境・管理の視点を改装では徹底し、レイアウトから変更。出入口もお客様用とスタッフ用とを分けてお客様とスタッフの動線を別にしました。また、桜島噴煙の降灰対策に軒先テントを設置。コロナ対策の一つとして店舗外に向けてショーケースを設け、入店しなくても購入できるようにしました。厨房は、調理台をステンレス製に一新し、包丁まな板殺菌庫や食洗機、自動水栓を導入しました。

結果として、お客様の認知度もぐっと上がり、利用者のモチベーションも向上したそう。市役所での出張販売のほか、注文配達にも力を入れています。

会議・会合向けの特別なお弁当やオードブルは利益率も日替わり弁当より高く、給料の平均月額(定員)も改装前年と比べ2025年度は1万円近くアップし、約3万3,000円となる見通しです。

当たり前の生活を支えたい

売上を「上げようと思えば、伸び代はまだあると思います」と語る山下さんですが、一方で利用者のやりがい・充実感とのバランスの取り方が難しいとも考えています。

「見学に来られた方はびっくりするんです。職員の指示なしで、利用者さんが勝手に考えて、勝手に作業するので(笑)。開店当初はイメージもしてなかったので、その自主性はうれしい誤算でした。日替わり弁当や総菜の献立も、利用者さんが考えています。職員はちょっと助言する程度です」その代わり、原価率より作りたいメニューが優勢になりがちなのは玉にきず。調理は作業毎の分業制ではなく、仕込み～調理～盛りつけまで、担当者が一貫して行うスタイルです。効率よりも「一人で自宅でも作れるようになってほしい」と考えたからです。

飲食がいいと言った利用者の方はその後、職員として採用しました。採用基準の課題を2年近くかけてすべてクリアしたそうです。

「彼は、利用者の憧れの的になりました。すると、自分もああなりたいって真似をする人も出てくる。利用者同士の刺激は大きいです。障がいの等級はあまり関係がない。無理だと思われていた人が、めちゃめちゃ仕事していたりとかありますので」と目を細めます。「利用者さんが地域の中で、生きててよかった、充実していると思える生活を送ってほしい」というのが山下さんの願い。

利用者の給料アップと働きがい、この二つを満たす解を模索するキッチンみらいず。彼らが一筆ずつ描いていく将来像に期待です。

労働組合支部執行委員長
助成先訪問 Series 48

ヤマト運輸労働組合
鹿児島支部執行委員
宮田 真紀子さん

カンパに込めた思いは実を結ぶ

みなさん、いきいきテキパキ、すごくしっかりとお仕事に励まれている姿が印象的でした。

山下さんが「(利用者さんには)自分のやりたい仕事をやってもらう」とお話しされていて、指示ありきの仕事ではなく、自主性を大事になさっているのが印象に残りました。

夏のカンパの使い途については、委員長を通じて伺ったり、財団Newsで目にしていたのですが、「助成金でこの設備を整えました」と直接、説明を受けたときには、役立っていることが本当に実感できました。うれしかったですね。

鹿児島ではこうした施設で、衛生管理の機材を整備したり活用されていると、もっと広めていきたいと思います。見学できて今日は、本当に良かったです。

自然栽培パーティ理事長
（社会福祉法人
無門福祉会事務局長）
磯部竜太さん

自然栽培パーティ事務局
（社会福祉法人
無門福祉会事務局主任）
川井彩湖さん

挑戦は確信に！自然栽培パーティ 10年の歩み

福祉×自然栽培が編みだす共生社会に向かって

全国の障がい者が自然栽培を通じて、地域の人たちとつながり、助け合い、ともに暮らしていく社会を目指している「自然栽培パーティ」。発足から10年を迎え、これまでの道のりと思い描く将来像について、磯部竜太理事長と事務局の川井彩湖さんに伺いました。

水稲自然栽培チャレンジがスタートして、田植えを取材（2015年6月4日、おもや（滋賀県））

参加5施設が一同に介して、水稲自然栽培チャレンジキックオフ（2015年3月9日）

自然栽培パーティ第1回全国フォーラム開催（愛知県豊田市 2016年5月20日）

一般社団法人農福連携自然栽培パーティ全国協議会（自然栽培パーティ）

ヤマト福祉財団小倉昌男賞を受賞した佐伯康人氏の自然栽培農法による水稲栽培の成果を検証するプロジェクト「水稲自然栽培チャレンジ」を前身に、2016年4月に一般社団法人として発足。

障がい者が自然栽培に取り組み、「ニッポンを健康に」を合い言葉に、現在その仲間は北海道から沖縄まで全国61施設140ヵ所にまで拡大しています。2023年には、彼らの活動を記録したドキュメンタリー映画「種まいて水やって自然栽培パーティ！」も公開されました。

これまでにないワクワク感があった

――すべての始まりは全国の5施設が参加した2015年3月の「水稲自然栽培チャレンジ」からでした。当時を振り返っていかがですか？

磯部：本当にお米ができるのかなっていうのがまず最初にありました。

つぎに新しいことが始まるなっていうワクワク感。プロジェクトの持つ深い意味合いは後々よく分かってくるのですが、それまで福祉の仲間が集まってチームとしてやっていくようなことはあまりなかったので新鮮でしたし、初対面でしたけどみんな思いは一緒。無我夢中でやっていこうという感じでした。

川井：私はふだん現場担当ではないのですが、プロジェクトが始まる前、有志の職員が集まって野菜を作ってみるグループに参加しました。

グリーンピースを植えたんですけど、手探りながらもこれが楽しくて、近くの農家さんに出向いてわら集めを手伝ってくれた利用者さんも一生懸命。その笑顔がイキイキしていて、自然栽培の活動はすごくいいなって思いましたね。

磯部：いざ農業をやってみると地域との接点がすごく増えました。

今まで交流のなかった人が話しかけてくれるようになったり、畑というフィールドが職員と利用者の関係をナチュラルな状態にしてくれてる、そんな感覚もあって、すごくいい取り組みなのは、始めて2ヵ月もしないうちに分かりました。ただ、賃金に結びつくかっていうところはまだまだでしたけど、福祉にとっては良いことだらけ。もっと多くの仲間に知ってもらいたいと思いました。

農業に対する概念が変わってきた

――2年の予定だった検証期間は1年に短縮され、（一社）農福連携自然栽培パーティ全国協議会が、ついに立ち上がりました。参加施設も飛躍的に増えたこの10年でしたが、さまざまなご苦労や発見があったと思います。

磯部：最初の頃は、実ればいいみたいな感覚もあって経営の感覚はあるとはいえませんでした。

一般農家と比較すると、収量は全然だったかもしれないけど、初年度はお米もびっくりするぐらい実りましたし、野菜もそこそこ採れた。

ただ、何年かやっていくうちにだんだん採れなくなってきたっていう時期はありましたね。今思えば、技術的な問題でやり方が悪かっただけなんですが、「理念は素晴らしいけど、自然栽培で経営できるかというと難しいかな」と思ったことが3年目くらいにはありました。

近年は科学的な分析もされていて、コツさえあれば採れるのは分かってきています。自然栽培パーティでも

弘前大学名誉教授の杉山修一先生に勉強会をお願いしたりして学んでいます。

農業に対する視線もこの10年ずいぶん変わってきたと思います。以前は農業と聞くと「休みがなくなるぞ」みたいな排他的なスイッチが入ってしまって、興味はあるんだけど、実際にやっていけるかなと考える福祉施設も多かったです。

ですが、近ごろは休耕地など、農の問題で地域がすごく困っているし、障がいのある方が活躍できて「こんなに美味しい野菜は初めて」なんて言ってもらえるようなこともあって、地域とつながりも持てる。時代が変わってきた感じがします。

川井：地域と関わるようになって、利用者さんも「今日はこの人に会える」みたいなモチベーションを持ったり、自然栽培パーティに参加する他の施設の利用者さんとも集まる場ができたので、地域を越えて利用者同士の交流も生まれましたね。

――農作業で活躍する利用者を「農福師」として表彰するようになった経緯というのは？

磯部：畑の中ってやっぱり常に変化があって、利用者さんも日々、新しいことにチャレンジして活躍しているのに、ご家族は「うちの子はなんにもできなくて」と仰る。

ふと考えてみると「頑張っているのにありがとうの声とか、感謝されることって、みんなあんまりないよね」という話になりました。ただ、活躍の姿は利用者さんそれぞれ違うので、丁寧に伝えるには資格みたいなものを作って表彰したらいいんじゃないかということになりました。

滋賀で開催した2020年の第4回全国フォーラムで始まったんですが、表彰状の文面は、みんな違うオリジナルなものになっています。

地域共生社会の処方箋になるかも

――次の10年に向けて、感じられている課題やこの先の展望をどう描いていらっしゃいますか？

磯部：問題は農業のことで言うと、気候変動が一番大きい。雨もずっと降らないですし、夏だとかも異常ですね。作付け品種などを考え直さないといけないかなと思っています。

社会の課題で言えば、耕作休耕地が増加の一途です。「一箇所でもいいからやってほしい」と頻繁に言われます。

福祉の直接の課題ではないですけど、地域は本当に困っている現状があります。農福連携の姿はある程度、確立したと思っていますが、新たな仕組みづくりの必要性も感じています。

川井：地域の小学生と総合学習の時間でいっしょにお米づくりをしていますけど、食の大切さや地域を支えようとしている人たちの存在を知ってもらいたい。

「美味しい野菜をまた作ろうね」といった会話ができる日常はそれだけでしあわせな時間。なので、こうした活動がいろいろな地域でじわじわと広がっていくようにしたいですね。

磯部：そのためにも自然栽培のしっかりとしたノウハウのプログラム化を今、検討しています。

10年歩んできて、土の特徴が掴めれば大失敗はないと分かったんですが、失敗したときに多くの場合、「自然栽培だから仕方ない…」と挫けがちなので、成功しやすい型みたいなものを、全国の福祉マインドのある方々にきちんと伝えていきたいと考えています。

立派な稲に成長。利用者、職員、近隣の方も力をあわせて稲刈り（無門福祉会 2015年10月10日（愛知県））

農業を仕事に、成長し楽しむ利用者さんに「農福師」の称号を（第4回全国フォーラム、滋賀県大津市2020年1月31日）

コロナ禍、全国の仲間をオンラインで繋いだ第5回全国フォーラム（北海道余市郡、2020年10月9日）

自然栽培パーティ10周年を迎えた全国フォーラム（2025年11月22日）

映画にもなった「種まいて水やって自然栽培パーティー！」試写会（2023年3月9日）

自信を持って「農業が好き！」と言える ～農福師たちの声～

「農業にはいろいろな作業があって楽しい」と明るくハキハキと話すのは農福師2年目の築瀬瑞希さん。椎茸や野菜の売れ行きが良いとうれしいと語ります。

10年選手の小川拓人さんは、切り干し大根づくりがお気に入りの仕事です。表彰されてみんなが喜ぶのが、うれしかったそう。

新海直樹さんは通所時代から数えると22年の大ベテラン。チェーン除草などの力仕事も「大変だけど好き」という頼もしさ。稼いだ給料はご家族へのプレゼントなどに充てています。

みな、田畑というフィールドで持てる力を存分に発揮している姿がまぶしかったです。

築瀬瑞希さん

新海直樹さん

小川拓人さん

2025年度
ヤマトグループボランティアプロジェクト

地域とつながるボランティア

ヤマト福祉財団は、ヤマト運輸労働組合と連携してヤマトグループ社員が地域の障がい者施設と繋がり、交流を深めていくボランティアプロジェクトを実施しています。

ヤマトグループボランティアPJ 農業編

障がい者施設の収入アップと、地域で繋がる事を目的に春・秋の年2回、全国2ヵ所で開催。今年は、埼玉県と長野県で実施しています。

2025年10月18日
埼玉福興株式会社・ヤマト運輸労働組合東松山支部

農作業の手が回らないところにヤマトの力を発揮！

春とはうって変わって秋晴れの10月18日、東松山支部のみなさん約30名が参加し、熊谷市にある埼玉福興(株)の農作業に汗を流しました。

猛暑で固くなった土を掘り起こし、傷が付かないように掘り出したサツマイモ。みなさんが収穫したサツマイモは地域の子ども食堂で焼き芋として提供されたり、サツマイモの蒸しパンを作るワークショップで使われるそうです。

国際オリーブコンテストで金賞を受賞している埼玉福興(株)には、300本以上のオリーブの木があります。サツマイモ掘りのあとには、伸び放題になったオリーブの枝の剪定や、ケアガーデンの種蒔き作業。「我々の手が回らない作業を手伝っていただき、本当に助かりました」と埼玉福興(株)新井代表が感謝を伝えてくださいました。

春、秋と続けて参加されたみなさんは、利用者さんとも仲良くなっています。東松山支部の坂本執行委員長は、「これを機会に夏のカンパだけでなく、支部活動として農作業のお手伝いを続けたい」と挨拶され、この日のボランティアを終了しました。

伸び放題になったオリーブの木の剪定をお手伝い

ようやく掘り出したサツマイモにヤッター!!

東松山支部のみなさん、お疲れ様でした！

2025年11月22日
社会福祉法人くりのみ園・ヤマト運輸労働組合長野支部

2時間で3万本を植えるヤマトパワーに、くりのみ園もビックリ

リンゴ祭スタートの11月22日、長野主管にとってとても忙しい日でしたが、ご家族も含め40名弱の労働組合のみなさんが小布施町にあるくりのみ園に集合しました。

春にはタマネギの収穫、この日は2.5反の圃場にタマネギの苗を植える作業がミッションです。くりのみ園お手製の穴開け機で、畑に穴を開け、細いネギのような苗を1本ずつ植えていきます。　赤ちゃんをおんぶして親子三代で参加されたご家族、「これがまあるいタマネギになるの？」と言いながら一生懸命植えるお子さんたち。みなさんの頑張りが、なんと2時間で3万本の苗を定植しました！！　くりのみ園が機械で行っても丸1日かかるという作業量です。これにはくりのみ園のスタッフもビックリです。ご褒美に、園内の畑にある白菜やダイコンなどをお土産に、収穫させていただきました。みなさんが植えたタマネギの苗が収穫できるのは、6月頃。長野支部青年部では、これを機会にくりのみ園と繋がり、定期的にボランティア活動をしていきたいと計画中です。

紅葉の雁瀧山をバックに長野支部のみなさん

親子三代で参加していただきました

青年部のボランティア活動として、くりのみ園と繋がるきっかけに

ヤマトグループボランティアP」地域福祉活動編

ヤマト繋がるプロジェクトとは／ヤマト繋がるプロジェクトは、社会人と学生が繋がり、地域の福祉に関わっていくボランティアイベントを企画・運営するプロジェクト。このプロジェクトは若者や企業・団体を連携しながら地域の課題解決に取り組む(NPO)アクションポート横浜とのコラボレーションによるものです。

自分だけのオリジナルトートバッグ作り!!
連携施設：NPO法人こんちぇると(さくらカンパニー)
コーディネーター：横浜市野七里地域ケアプラザ

5年目のボランティアプロジェクトは、トートバッグ作り！

ヤマト運輸労働組合青年部と大学生がコラボして、横浜市内の障がいのある方達と交流するイベント。学生が施設に通い、準備に8ヵ月もかけ、ようやく1月17日に開催しました。

トートバッグの両面にヤマト労組青年部や大学生が作ったイラストや型紙を元に、色をのせて完成させます。片面はヤマト労組青年部が作った型紙、もう片面は9枚のトートバッグを並べると1枚の絵になるという仕掛けです。できあがったトートバッグは利用者さんのポスティングに使用します。
企画学生は、報告の中で「誰かの挑戦を作る経験ができた。一緒に何かを作る、一緒に笑う、といった経験を通じて、障がいの有無に関係なく『人と人が繋がる』という瞬間に立ち会えた事は私にとって大きな財産になった」と、話します。8ヵ月、ほぼ毎週施設に通って企画を練り上げる過程は学びも多かったと言います。

手ぬぐいプロジェクトでは、最終年を記念し、関わった施設やヤマト労組青年部、学生が描いたイラストをデザインした手ぬぐいを制作。持っているのはヤマト労組青年部の関根蘭さん

2026年2月14日
2025年度ヤマト繋がるプロジェクト報告会

5年間の「繋がり」が描いた歩み――ヤマト繋がるプロジェクトは卒業へ

2021年、コロナ禍という不安の中で産声を上げた「ヤマト繋がるプロジェクト」。ヤマト運輸労働組合青年部、(NPO)アクションポート横浜、そして大学生達が協力して、地域福祉に貢献するボランティアを企画・運営してきました。発足当初はオンラインの活動がメインでしたが、年を追うごとにその輪は広がり、これまでに延べ540名もの人々がこのプロジェクトに関わってきました。
今年度は、オリジナルトートバッグ作りに加え、5年間の繋がりを形にする手ぬぐいプロジェクト、報告書を作成。5年前、手探りで始まったこのプロジェクトも、今年度で大きな節目を迎えます。この活動を「終了」ではなく「卒業」と考えています。プロジェクトという枠組みを離れたあとも、ここでの経験やつながりが、参加者一人ひとりの宝物になっていくことを願っています。

こんなおしごとを体験しました!!

埼玉県版

2026プレ開催

彩ジョブ おしごと発見フェア

おしごと発見の場つくり

埼玉県ではじめて「働きたい障がい者と採用したい企業」をつなぐ参加型イベント「彩ジョブ おしごと発見フェア」を1月31日、約90名の参加者を集めて、志木市民会館仮設会議室で開催しました。

ヤマト運輸(株)
荷物の仕分け、ヘルメットや安全靴クリーニングの仕上げなど

(株)角川クラフト
自社の自家焙煎所で行うコーヒー豆の選別

(株)JR東日本グリーンパートナーズ
制服管理の棚入れ、ピッキング、発送前の確認まで

(株)ホンダ太陽
自動運転のためのアノテーション作業、スキャニングなど

(株)松屋フーズ
エプロン、帽子を着用、お盆に皿などを並べてお客様へのサービスを体験

(株)舞浜コーポレーション
園内のレストランで提供するナフキン折りや、パーク限定のポストマーク押しなど

(社福)めぐみ会
車椅子の操作、移動介助など

(社福)ヤマト自立センター障害者就業・生活支援センターSWANが主催し、埼玉県版の「彩ジョブ おしごと発見フェア」が開催されました。「働きたい障がい者と採用したい企業」をつなぐイベントに、七つの企業・団体と参加者約90名が集まりました。

山内理事長は「おしごと発見フェアを沖縄県以外で開催する初の試みです。日本全国に広げ、障がいのある方がもっと活躍できる世の中になっていくことを目指しています」とオープニングで挨拶。参加者は、「こんな仕事があるとは知らなかった」企業は、「経験してもらうのが一番の近道」と話しました。同時開催した「おしごとなんでも相談コーナー」は多数の方が相談に訪れ障害者就業・生活支援センターZAC職員の方がアドバイスを行いました。「彩ジョブおしごと発見フェア」はコンパクトで参加者がほぼ全ブースを体験出来て盛況のうちに終了しました。

おしごとチャレンジ体験会出展企業・団体一覧(五十音順)

(株)角川クラフト／(株)JR東日本グリーンパートナーズ／(株)ホンダ太陽／(株)舞浜コーポレーション／(株)松屋フーズ／(社福)めぐみ会／ヤマト運輸(株)

後援
厚生労働省 埼玉労働局／埼玉県／埼玉県教育委員会／独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構JEED ／公益財団法人ヤマト福祉財団

協力
障害者就業・生活支援センター ZAC ／十文字学園女子大学

クボタインクルージョンワークス(株)／農業・建設機械、環境機器の大手クボタグループの特例子会社。全国に拠点を構え、グループ会社内の事務や清掃業務のほか、水耕栽培事業を展開。幅広い業務で、働く人の個性に合った働き続けられる職場を目指しています。

ジョブパートナーの中原 優さん(左)と及川裕大さん(右)

働く職場を支えて 明日の自分を育てる

充実したフォローアップ体制とキャリアアップ制度の整った職場環境で、自分らしさをいきいきと発揮している及川さん。ビジネスの現場を支える貴重な人材となっています。

■社会福祉法人ヤマト自立センター スワン工舎　就労に必要なスキルの習得はもちろん就労先の開拓からジョブコーチによる就労後のサポートまで一貫したプログラムで、障がい者の自立支援に取り組んでいます。

中原さんは「リーダーとして悩みや苦労も感じているでしょうが、それを彼は前向きに捉えてくれています。」と期待を寄せます。

「忙しい時もあるが、チームでやっているので、自分だけが大変と思い詰めることは意外とない」(及川さん)

及川 裕大 さん　クボタインクルージョンワークス株式会社(2021年9月1日入社)

就職した翌年、お母様の誕生日にプレゼントしたのは本人曰く「ちょっとだけいい扇子」。とても喜んでくれたそう。明るいムードメーカーで、スワン工舎ではリーダー的存在でした。趣味はカメラ。乗り物も好きです。

気負わず、けれど着実に。新しい役割へと踏み出す一歩

「仕事ぶりを評価していただけたりとか、自分が担当している会社の方から声をかけていただいたときは、うれしく思います」

快活にそう語るのは、クボタインクルージョンワークス株式会社に勤める及川裕大さん。勤務地は京橋にあるクボタ東京本社内のオフィスです。グループ各社から依頼された事務作業などに取り組むオフィスサポート部に入社して4年半を超えました。

事務用品の管理や、注文書など紙書類のデジタル化のほか、各社員が自分宛の配達物が届いているか確認するためのシートの作成が主な業務ですが、研修会などがあれば資料の印刷丁合から会場設営まで対応します。

入社当時から及川さんをよく知る課長の川田文広さんに伺いました。

「実習に参加された中で一番若かったんですけど、受け答えがハキハキして、自分から率先して動く姿勢が印象的でした。事務能力も高かったですし、それと何より人間性。誠実さがありました」と、採用の決め手を振り返ります。

物怖じしないスタイルは今もそのまま「つねに前を向いて、自分の意見をしっかり説明して指示を出すとか、いろいろな人に声かけもしていて、みんなからの信頼も厚いです」。

毎月の面談や手順書の作成を通して、及川さんが所属するチームをサポートしている同部の中原優さんも、熱心に業務改善の提案をする彼の姿に感心しています。

今年初め、そんな働きぶりが評価され、職域リーダーに昇格しました。これは同社のキャリアアップ制度に則ったものです。

「最初の本音は、『自分でいいんですか?』でした」と及川さん。「自分が引っ張らなきゃと気負いすぎて、他の方に指示や命令などはしないように意識してます」という言葉には、職場経験を積んで培った及川さんの思慮深さが滲みます。

リーダーになったばかりですが、機会を見てさらにキャリアアップをしていきたいと語る笑顔に、静かな意気込みが見えました。

障がいのある社員と伴走するジョブパートナー職を務める川田文広さん(左)と中原優さん

研修・育成プロジェクト

財団では、小倉昌男賞受賞者や有識者を講師として、全国の施設運営者・職員を対象とした研修を行っています。利用者さんの給料アップを目指した事業の見直し、専門技術などを学びます。

農福経営実践塾

農業を事業とする施設の責任者を対象に農業で給料アップをするための事業経営を学び、実践して行きます。

第2回農福経営実践塾
2025年9月29・30日
(NPO)ピアファーム(福井県あわら市)

課題解決へ、時間を忘れて熱い議論

第2回研修会では、ピアファーム林博文氏による講義のほか、グループワークを実施しました。グループワークでは「1. 農業・経営について」「2. 農福での地域連携」「3. 利用者さん対応関連」「4. 施設職員関連」の四つのテーマの中から討議するテーマを選び、自分たちの課題を抽出、解決策へ議論を深めていきました。「異常気象で思ったように収穫ができない」「作付けの失敗」「利用者が増えない」等々、日々の課題への議論は、時間が足りずに研修会場で夕食を取りながら続けるほど。翌日は、施設外就労を積極的に受け入れ、ノウフクアワードをはじめ数々の賞を受賞されている(株)笠間農園の笠間社長に、農園開設から、施設外就労の受け入れなど笠間農園の物語を伺いました。その後、ピアファームの農場を視察。なしの収穫体験を行い、研修を終了しました。

第3回農福経営実践塾
2026年2月19・20日
(NPO)杜の家ファーム(岡山県岡山市)

確実に利益を残すプロセスを学ぶ

杜の家ファームは第2期ぶどう栽培塾の塾生施設です。初日は、杜の家ファームの視察。35アールのハウスで栽培されているいちごの収穫、選別、パッケージ包装を体験しました。翌日は、「いちご栽培で実現する農福連携の経営」をテーマに杜の家ファーム大森前理事長の講義、2016年から農福連携を進めるアソシエート・ファーム(株)石村代表の「共生社会デザインに向けた取り組みについて」というテーマで講義を受けました。熊田塾長は、「お二人の『収入を緻密に計算して、確実に利益を残すプロセス』というお話しは、福祉が足りない部分で、学ぶべきヒントが詰まっていました」と総括しました。

第2期たまねぎ栽培塾成果発表
2025年12月13日

播種から栽培、販売までを完走、1年間の成果

成果発表会では、2024年6月から1年間、それぞれに目標を設定し、たまねぎ栽培に関する技術習得や、農作業に関する取り組み、改善方法などを学んできた塾生が成果をひとりずつ発表。成果発表会には山内理事長もZoomで参加し、ひとり一人へ経営的な視点からコメントをいただき、たまねぎ栽培塾の小淵塾長から実践的なアドバイスをいただきました。塾生は、それぞれに成果をあげ、塾生同士の繋がりができたことに感謝し、次への実践に向かっています。

第2回オンライン研修会
2026年3月19日

農福連携の先駆者に学ぶ

第2回オンライン研修会は、2025年12月に開催された「ゆずりは会20周年記念フォーラム」で登壇された京丸園株式会社の鈴木厚志氏、大隅半島ノウフクコンソーシアム理事兼事務局長の天野雄一郎氏、そして「たまねぎ栽培塾」を代表して一般社団法人日々木の森の立崎弘樹氏（2期生）の3名の講演を視聴しました。

「2026ノウフクフェスタ@上野公園」に農福経営実践塾が参加
2026年1月24・25日

実践塾の学びを「販売」の現場へ

2026年1月24日（土）・25日（日）の2日間、上野公園で開催された「2026ノウフクフェスタ」に、農福経営実践塾も参加しました。2日間で30,000人を超える来場者があったこのイベントは当塾のメンバーである「ぶどうの木」が主催。ヤマト福祉財団実践塾として出展した「ノウフクマルシェ」ブースでは、塾生4事業所による新鮮な野菜や加工品を販売したほか、「ノウフク食堂」ブースへも食材を提供しました。

非常に厳しい寒波の中での開催となりましたが、ヤマト福祉財団ブースの2日間の売上は合計15万円強を達成。寒さを忘れるほどの熱気に包まれた2日間となりました。

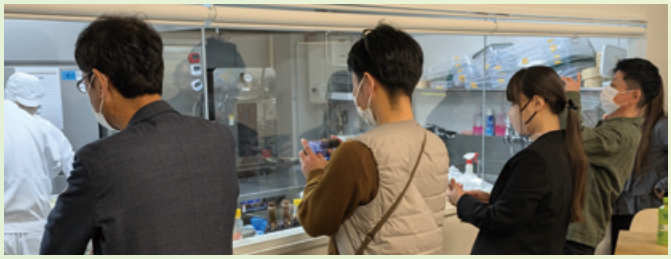
お菓子の販路拡大研究会

本研究会では、互いのノウハウや情報を共有し、スキルもマインドも売上も高め合う研究会。工賃が現在の2倍、もしくは5万円の達成を目指します。

第5回勉強研究会
2025年9月25～27日
（ヤマト運輸葉山研修センター 神奈川県横須賀市）

「誰に、何を届けるか」をとことん考え抜く

今回は、滋賀県でデザイン・商品企画を手がけ、B型事業所でのデザイン指導など多方面で活躍されている面白創（おもしろそう）代表のヒロセタクヤ氏を講師にお迎えましました。「ターゲットを知り商品価値を高める」というテーマで講義をいただいたほか、実践的なグループワークを実施。それぞれに持ち寄った商品を題材に褒めあったり、商品づくりやキャッチコピーを練り上げたりなど、自分たちでとことん考えることに重点を置いた勉強研究会となりました。



第6回勉強研究会
2026年1月23･24日
（（社福）薫徳会FLAT HACHIROKU 愛知県名古屋市）

成功と失敗から得た教訓を糧に、学びを深める

第6回より、業務開発コンサルティングや6次産業化支援等を行う株式会社プラスリジョン代表の福井佑実子さんを講師にお迎えしました。これまでの研修内容を振り返り、●原価計算、単価設定、売上目標の立て方　●パッケージデザインやターゲット設定による付加価値アップ　●「衛生管理」のケーススタディ　について、改めて学びを深めました。各研究生の発表では、成功・失敗事例から得た教訓等を共有。現場の悩みに対するアドバイスや情報交換が行われ、販路拡大への決意を新たにする有意義な2日間となりました。

第7回勉強研究会
2026年2月27･28日
（（社福）熊本障害者労働センター（おれんじ村）熊本県熊本市）

品質・衛生管理、製造工程を学ぶ

今回の会場となった「おれんじ村」は障がい当事者が代表を務める事業所です。「工賃をさらに向上させたい」と、研究生に交じって代表もこの研修に参加しました。

第6回に続き講師には株式会社プラスリジョン代表の福井佑実子氏を迎え、「品質・衛生管理の徹底に関する各研究生の取り組み」「効率的な製造行程表の作成」について学びました。おれんじ村を見学しながら、手作りお菓子の製造スタッフと良い点や改善すべき点について意見交換も活発に行われました。

YWF TOPICS

ヤマトグループ社友会員さまから あたたかいご寄付をいただきました。

2025年12月、山内理事長より社友会会員（ヤマトグループ幹部OB・OG）様に、当財団の活動内容を改めてご説明し、ご寄付のお願いをいたしました。ご賛同いただきました会員様から170万円を超えるご厚志を預かりました。社友会のみなさま、ありがとうございます。
また、ヤマトホールディングスの周年イベントについて、従来慣例となっていたお取引様からの祝花等のご祝意をSDGsの観点から辞退しております。その代替として当財団の活動へのご寄付をご案内し、お取引様より230万円を超える多大なるご支援を賜りました。お取引先様、感謝申し上げます。

伊東屋様、ヤマトグループのみなさま カレンダー募金のご協力をありがとうございました

毎年、文具専門店の伊東屋様（東京都中央区）からカレンダーのご寄付をいただき、ヤマトグループでカレンダーを通じた募金活動を行っています。全額が（社福）ヤマト自立センターに寄付されました。ご協力をいただいたみなさま、感謝いたします。

姫路主管支店

道東主管支店

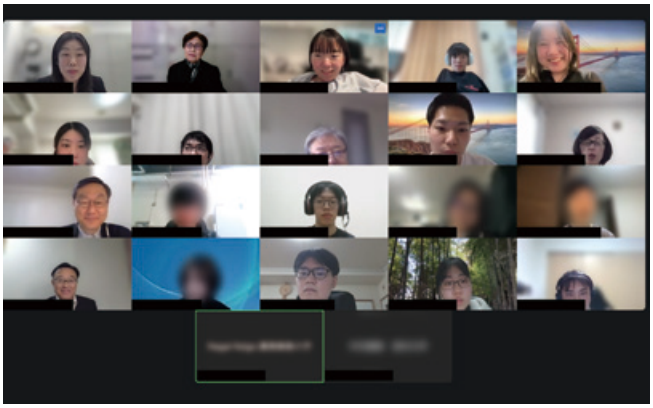
「働く力と工賃向上 障がいのある方が働くとは」を発刊しました

2025年4月にスタートした「働く力と工賃向上テキスト制作委員会」。第9回ヤマト福祉財団小倉昌男賞者の故新堂薫氏を塾長とした新堂塾OBOGの有志が新堂塾アドバイザーの菅野敦氏（東京学芸大学名誉教授・（社福）武蔵野千川福祉会理事長）の監修のもと、協働で執筆する「働く力と工賃向上」が3月に発刊となりました。
今後、本書をテキストとして、セミナーを開催。全国の事業所に活用していただき、障がいのある方の働く力を伸ばし、工賃向上に繋げていただくことを期待しています。

A4判　2026年3月発行

2025年度 ヤマト福祉財団奨学生のオンライン懇談会を開催 画面越しに広がった奨学生の輪

2026年2月7日、ヤマト福祉財団は「2025年度 奨学生オンライン懇談会」を開催しました。全国から参加した15名の奨学生は、医学、工学、文学など多岐にわたる専門分野で学んでいます。
これまでの先輩の体験を聞く形から、奨学生同士が直接語り合う「交流の場」としてプログラムを構成。三つのグループに分かれて、「大学での学び」や「学生生活の工夫」「就職や進学」をテーマに交流しました。工学・情報系グループではプログラミングの共通点が話題になり、医学・獣医学系では外科手術と検疫業務といった専門的な議論で盛り上がるなど、分野を超えた活発な情報交換が行われました。
参加者からは「同じ境遇で頑張る仲間の存在が刺激になった」という声や、「移動の大変さなど、奨学生ならではの共通の悩みで盛り上がれた」といった感想が寄せられました。終了後も続けて交流を希望する声が上がるほど盛り上がり、画面越しに新たな繋がりが生まれたひと時となりました。



全Aネット就労支援セミナー in小倉 「これでいいのか?! どうするA型」をテーマに

2025年10月25日、北九州市小倉で就労支援セミナーが開催されました。障がいのある方が雇用契約を結んで働く「就労継続支援A型」事業所が、制度の転換期を迎える中、「これでいいのかA型制度」というテーマで行われました。朝日雅也氏（埼玉県立大学名誉教授）をはじめ最前線で活躍する専門家が登壇。コーディネーターの村木太郎氏による「スコア方式の改定に伴う事業所の二極化と制度の再定義の必要性」という提起を軸に、多角的な議論が展開されました。結びに全Aネットは「A型事業所のあり方研究会」の立ち上げを発表。将来を見据え、障がい者就労のあり方を再構築する出発点としてさらに議論を進めていきます。

ヤマト福祉財団 News No.88
4月20日発行 2026 Spring
公益財団法人ヤマト福祉財団

詳細情報・最新情報は https://www.yamato-fukushi.jp/
ご意見、お問い合わせは y.zaidan@yamatofukushizaidan.or.jp まで

第27回

ヤマト福祉財団小倉昌男賞 募集

推薦募集期間:6月1日～8月31日

正賞:雨宮 淳氏作 ブロンズ像「愛」／副賞:賞金100万円

ヤマト福祉財団では、障がい者の仕事づくりや雇用の創出、拡大、労働条件の改善等を積極的に推し進め、障がい者に働くよろこびと生きがいをもたらしている人の中から毎年2名の方に「ヤマト福祉財団小倉昌男賞」をお贈りしています。「この人をぜひ」と思われる方のご推薦をお願いいたします。

※詳しくはホームページをご覧ください。QRコードより、第26回ヤマト福祉財団小倉昌男賞贈呈式の様子をYouTubeでご覧いただけます。

ヤマト福祉財団ホームページはこちら ▶

2026年度 パワーアップフォーラム

「人は自立して生活することで幸せを感じられる」

開催のお知らせ

特性を力に ～個性を活かした働き方で最大の成果を導く～

東京会場 2026年7月24日(金) 10時～17時
全国社会福祉協議会 灘尾ホール(千代田区霞が関)

大阪会場 2026年9月4日(金) 10時～17時
マイドームおおさか(大阪市中央区)

つたわるフォント 読みやすさを追求した書体

VEGETABLE OIL INK

参加登録方法

詳しくはヤマト福祉財団ホームページをご覧ください。(5月上旬に公開します)